

広島俳句倶楽部

令和四年六月作品集

初夏の深入山を歩く 松田裕子

五月、家族で東北の深入山、八幡高原へ行きました。深入山は美しい草原の山です。初心者向けの山ということで、軽い気持ちで登ったものの、足をガクガクさせながら、ようやく頂上に立つことができました。若葉で輝く景色の中で食べるおむすびの美味しかったこと、よい思い出となりました。

そこらぢゆう立夏の風や樺林

走り根に腰掛けてる夏の山

滴りに近づいてゆく森の中

岩清水岩のかたちに流れ変へ

夏山のとっぺん望み岩に立つ

山頂に立てば囀り足元に

登山靴の足投げ出して岩の上

新緑の山また山が国ざかひ

夏山の遙か向うは日本海

湿原の木道越ゆる夏の蝶

《作品鑑賞》

暁子

初夏の爽やかな季節に囲まれた登山です。深入山は秋同様、新緑の季節も又格別です。

そこらぢゆう立夏の風や樺林

「立夏の風」「樺林」の取り合わせが素晴らしい、「そこらぢゆう」が清々しさの広がりを一層増幅しています。

登山靴の足投げ出して岩の上

「足を投げ出す」は軽い疲れと共に達成感もあったのではないのでしょうか。作者の様子が目に見えるようです。

新緑の山また山が国ざかひ

頂上から望む山々を一望し、あの辺りは？など想像しています。全句に初夏の爽やかな山歩き感動が溢れています。

俳句と私

森口良樹

役所を退職して十年が過ぎた。この間、何か目的を持ち、それに向かっていたわけではない。強いて言えば、心筋梗塞で手術を二度受けたこと、ひょんなことから俳句を始めたくらいである。術後に、医師から散歩がリハビリに最適だと指導を受けた。毎日一定のコースを巡るのが、私の句づくりの時間でもある。日々の季節の移ろいを肌で感じ、始めたのはこの頃からだ。これからの余生を、ゆつくり近所を散歩しながら俳句を楽しみたい。

白鷺や中洲の風を背に受けて

けばけばしき声して鷺の巣籠れる

鳶尾草の角を曲がれば我家見ゆ

オリーブの花の屑寄せ風の吹く

バス停に日の差してをり青景雨

雨垂れに低き音して青芭蕉

片蔭をいつもの刻に辿りたる

お社の猫に会うたる日の盛

今日もまた噴水上がる午後三時

短冊に十句揃へて夏の夜

《作品鑑賞》

村上正人

ひょんなことから俳句を始めたとおっしゃる森口良樹さん。先に俳句を染しんでおられたお兄様からのお声掛けがあり、俳句を始められたとのことである。大変お忙しいお仕事で退かれた今、健康維持の散歩から素敵な句が生み出されている。

鳶尾草の角を曲がれば我家見ゆ

一巡りの散歩も終盤に近づけば、角から「我家」が見える。そこに咲く「鳶尾草」から、馴染みの近所という感が伝わる。

お社の猫に会うたる日の盛

お社の猫に「会う」という表現が面白い。目が合ったとしても、おそらく日の盛の猫は寝そべり、動かないのであろう。

今日もまた噴水上がる午後三時

今日も時刻通りに上がる噴水に、しばし暑さを忘れる。散歩の順路にひと息つける季節ごとの場所があるのかもしれない。

藤懸かる山へと人の入りゆく

松蟬に備前備中分かれたる

神の前通りて春の海に出づ

薰風の神の島より戻りけり

真つ直ぐに上古の道や紫蘭咲き

糸里制跡に大学青嵐

新緑の山や古墳は開口し

亀は鳴き八幡宮は静まれり

老鶯や吉備の社の国つ神

青嵐の伯耆に用事すませたる

大き鳥飛び立つ朝の葎かな

こちらへと柏景紫陽花なだれ咲く

木立より沼へと抜けて杜若

新しき病院の庭杜鵑花さく

山間の学校に聞く時鳥

天窓の眩き夏の日差かな

アカシアの香る通りに差し掛かる

卯の花に半月懸かり暮れにけり

今まさに雨降り始む花あやめ

雨風の中にありたる栗の花

一青に揺るる茅花に暮れにけり

吾が影に罪なき蟋蟀の散りにけり

薔薇園の風吾が額に受けてをり

明けてゆく葵を人の手入れして

明け方の雨に濡れたる花あやめ

はるかなる山の映りて植田かな

花菖蒲山家の庭によく咲いて

噴水の向う手を振り人の来る

睡蓮に鐘街く人の途切れなく

夕風の山椒の実に近づきぬ

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

花の影雁木に揺れて汽水川

藤の花二階の屋根まで咲きにけり

石灯笼笠に零るる松の花

堰落つる水を離れず揚羽蝶

牡丹のはらり崩るる早さかな

フェンスからはみ出して咲き手毬花

梅の木の花の先まで実を連ね

保養所の大きな窓や梅雨晴間

さざ波を跳び越えて行くあめんぼう

対岸にアカシアの花咲きにけり

秋沙

綱引の歓声あがる五月かな

綱引の砂埃立つ薄暑かな

噴水の止まりしままに五月尽

夏はじめ指揮者の繻子のマスクかな

オカリナの四重奏聴く夏はじめ

景桜や赤子の丸き足の指

クレマチス色も形もちがひたる

新聞を夏座布団に子のめくる

梅雨明けの空を仰げるマスク顔

鈴植の青無花果の一つかな

亜矢

草萌やベンチで過ごす昼休み

苜蓿の原に投げ出す素足かな

吾子の髪結へばいつそう風薫る

夏曉の川面に町の映りたる

アクセルを踏めば茅花の通り過ぐ

青梅をよけて自転車蛇行せり

手入れせし紫陽花並ぶ交番よ

石楠花の色にあふるる一戸かな

けふの身を洗ひ流せる夕立かな

町中の枇杷の木にある涼しさよ

綾乃

貯水池を囲む藤棚めぐりたる

山の木の匂ひ立ちたる夏初

見渡せる山それぞれの若葉風

梅の葉の蔭に聞きたる四十雀

穴道湖へ母と連れ立ち夏の旅

夏暁の湖に水脈引く漁り舟

あいの風松江の湖の暮れゆけり

穴道湖の出湯にひたる薄暑かな

晴嵐や桐の花咲く山に入り

入梅の樟の葉の色見てをりぬ

井藤希

薰風や隣の犬の寄り来る

そこかしこ湧水のあり花菖蒲

老鶯や登り始めて小半時

袋掛近くに猿も居るさうな

白色の紫陽花並び寺高し

新宅に子ども好みの夏蒲団

箱庭に故郷の石並べたり

風鈴で来客を知る散髪屋

長堤にペンライト点き夜釣かな

老犬を先に入れたる砂日傘

栄吉

青空に木の芽を伸ばす大公孫樹

車窓から田圃の蛙聞いてをり

花菖蒲池に小雨の降りつづく

赤白黄小庭の薔薇へ雨の降る

いつも行く道に空木の咲きにけり

新緑の山を廻りて帰郷せり

故郷の川に河鹿の鳴いてをり

昼も夜も山の端に鳴く時鳥

南風吹く岬の先に水平線

無花果を持たせて帰る子を送る

大畑恵

暮れてゆく卯の花垣に人の声

その上に梅雨の空あり天守閣

額の花咲いて川音近き町

蓮の葉を打ちつづけたる夕の雨

時鳥すぐそこに鳴く山家かな

背戸山へ窓を開けば時鳥

簪目を消して過ぎたる夏の雨

高原の岩を掠めて夏燕

片蔭の尽きたる道を岬まで

朝焼や一雫いまだ静もれる

暁子

雪解や岩根にしばし鶉の止まり

咲き満ちて桜に古き駅のあり

桜まじ遠くの谷の屋根光る

勤行の僧の声する躑躅かな

葱坊主頬被りして見てをりぬ

田水張る谷の薨の遠く見え

トンネルに入る寸前桐の花

鯉幟泳ぐ屋敷は川向う

靄りたる植田をコウノトリの飛ぶ

夏霞落合といふ駅に降り

新庄憲彦

山法師好きと娘は庭に植う

しもつけを母と育てし日のありて

薔薇の花一本飾り八十路の夜

揺れてゐるシーツの先の海芋かな

家裏も表も聞こえ時鳥

紫陽花の蔭より来たる男の子

垣根越し泰山木の花の見ゆ

隣人と話の弾む溝浚へ

杖振つて居場所を知らせ新樹光

緑蔭に皆を待ちゐる車椅子

すみれ

降り止まぬ雨に水馬輪を作る

水際より音立て潜る錦鯉

夏霧にさざ波寄する朝かな

睡蓮を見知らぬ人と見てゐたり

梔子の花の垣より杖の人

また一つ梅の実落つる坂の道

真上から鳥の声する夏の朝

藻の花の揺れて魚の居るらしき

いつまでも番で飛べる夏の蝶

夏萩をまづ揺らしけり朝の風

知佳子

待ち望む隣に燕来たりけり

玄葵出窓の先に咲いてをり

故郷の青梅夫の櫓ぎにけり

リビングに青梅の香の広がりぬ

ラジオかけ一人でお茶を摘みにけり

昼寝して母は後からお茶を摘む

祖母のこと話しつつ母お茶を摘む

今年から夫も入りてお茶を揉む

玄関に母の紫陽花生けにけり

水馬取水口より遠く居り

ちどり

薄暗き藪の中より今年竹

夏の蝶葉末に止まり身じろがず

葉の裏に小さき殻や蝸牛

竹の葉の川面に落ちて流れゆく

空白む今鳴いたのはほどどぎす

弥山嶺の上に立ちたる雲の峰

のしかかり身を潰したる暑さかな

草引いて軍手に絡む団子虫

畑仕事終へて素足の置きどころ

白波が白波を追ひ夏の浜

友岡崇山子

蕨摘む手の榮まるをも知らずして

古鉢の化偷草^{いびく}今年も咲きにけり

窓からの薔薇の香りに声を呑み

新茶だと茶を汲む父に呼ばれけり

筍を湯がく香りの家に満つ

退院の母を誘うて螢狩

アマリリス北と南に向いて咲き

蕺草^{いんげん}をわんさと干せる隣かな

軒下に蕺草^{いんげん}の束干してあり

今年またそろそろ始む梅仕事

真ん中にしやがむ女か菖蒲園

いなかつた男子寝ている夏の朝

紫陽花や物も言わない小さき子ら

道続く実梅豊かな天と地と

手の中にありし螢火高くなる

螢火のあまたが順に暗闇を

鯉の住む水より高き浮葉かな

糸蜻蛉手紙の文字に留まる影

飛行機の轟音遠く風薫る

体ごと荷物もなして青嵐

たんばばの絮いま風に吹かれをり

ひと雨に霧島つゞ濃くなりぬ

初夏の波つゞと寄せにけり

花淡ひと叢づつに日のあたり

麦の秋園児の列の通りたる

定期船丘の皐月を近く見て

日のあたる峠の道や著蕺咲いて

植田いま里の山々映したる

山ぼふし二階から見る白さかな

夜の明けてまづ青田より日のあたり

雲雀

ふじ女

松田裕子

電車の灯遠く横切る夏の川

螢火のふはり周へと紛れゆく

梅雨深き港に船の着岸す

ペダル踏む風に白シャツ膨れたる

赤銅の肌に張り付く汗のシャツ

砂浜を歩いて行けり夏帽子

涼しさよ茅屋の広き土間に居て

打水に風の立ちたる夕間暮

急ぐ帰途の真つ正面に雲の峰

振花や不撓不屈に生きし父

森口良樹

新樹光玉眼に風届きけり

卯の花や御堂に風の通ひたる

卯の花へ渡つてゆける夜の橋

勤行の間の不如帰よく鳴けり

弟の手入れしてゐる夏の庭

夫と居て草より螢掬ひけり

お隣の紫蘇よく育つプランター

花びらを四方に落とし蓮の花

万緑に阿形畔形立つてをり

桑門わかこ

夏めくや駅のホームに葡萄棚

雉鳴くや木の間隠れに八ヶ岳

青嵐全山見ゆる八ヶ岳

花林檎主峰赤岳ごっこ

夕風に螢袋の揺れ易し

夏みかん両手に持ちて重きこと

山荘の石楠花咲いて休暇果つ

山門の開きしままや夏椿

夕風に落花のしきり沙羅の花

辻純江

駅の戸の開け放たれて夏つばめ

笹百合に近づいて行く人の声

利尻富士夏野の裾に迷ひけり

千切れ藻の流るる早さ夏の川

十葉の庭の垣根を越えて咲き

サングラス外して見入る参観日

夏木立抜けければ母の里であり

日傘差し仏の花を摘みにけり

はらからと競ふ水切り大西日

山野ウタ

夏燕さざ波の立つ手水鉢

一輪のカーネーションの白さかな

留守番の友はでで虫ばかりなり

夜濯や針が日付をまたぐ頃

愛猫の十九の夏を迎へたり

小糠雨青稻伝ひ落ちにけり

三尺寝大工の脇に太宰かな

村上理江

薔薇園の物腰柔き案内かな

ややの顔ほどの紅薔薇咲かせをり

挙式終へ薔薇の花びら浴びせ掛く

ローマ字の表札掛かる薔薇の家

窓枠のゆるき曲線若景風

八番線九番線兼ね駄薄暑

高梨英子

艦隊の大波つくる春の沖

雑草の中に芍薬二輪咲く

日焼けした腕の分だけ芋育つ

湯上りの肌を涼風撫でてゆく

風吹いて薄の穂より露の落つ

英一

八重桜一輪を添へお奇かな

どくだみの花の盛りの白さかな

玄葵倒れしままに咲いてをり

梅雨入りの前の草取り気ぜはしく

擬宝珠の花に留まり水の玉

紀英子

卯の花のこぼるるままに留守の庭

ふつふつと湧き出るやうに花空木

山梔子の香るベンチに本を読む

借景の山に鳴きたる時鳥

万緑や安土城へと道づき

撫子

卯の花の道を駆け抜け陸上部

花空木駅舎に食ぶる出雲そば

出迎への赤き傘かな梅雨最中

美術展見終へし窓の青葉かな

熊谷ゆり子

街路樹の若葉しげりて風さやか

紫陽花のむらさきを見る雨あがり

卯の花や友と歩きし通学路

金川昭子

雨止んで泰山木の花眩し

日暮まで間のある山の時鳥

梅雨最中習ひ始めのパンを焼く

上島康子

更衣女子高生の長き列

梅の実の熟せる香り手に残る

ほとどぎす聞きつつ山を下りけり

河原静子

老鶯や写経の筆を置いてより

白南風や傘寿の旅の加賀の海

はらからと茅の輪をくぐる旅に居て

高嶋絹代

ほとどぎす今年も里に鳴いてをり

あちこちにほとどぎす鳴く雨あがり

ほとどぎす山から声の聞こえて

民

囀れる鳥たちよ来よ餌を撒かん

若景風平和公園に祈る人

露けしや母の衣を子が継いで

津田玲子

卵の花を伊部の壺に活けにけり

姉と行く南紀白浜蟹舞ふ

蟻の道違ふ二つの目飽きもせず

幹

薔薇匂ふ丘の小径のデートかな

病む人の遠くにありて時鳥

十重二十重ひまはり咲いて迷路なり

みさ子

麦秋の大山見上ぐ畑の中

卯の花やはらから揃ひ膳囲み

胡瓜揉みガラスの皿に入れにけり

やす保

令和四年五月度作品集より

井藤 希 私の選んだ十句

大いなる蔭を持ちたる桜かな	佐保光俊
虚ろなる風に梅の香ありにけり	高尾ひとみ
青麦を流るる風が届きたり	綾乃
新緑が海を隠せる物見窓	栄吉
バス降りて一步に匂ふ椎の花	暁子
橋脚の汽水深きを鮎のぼる	新庄憲彦
水音に沿うて歩ける薄暑かな	知佳子
水田の影の早さや夏燕	友岡案山子
枇杷の実に風吹いてをり熟れてをり	桑門わかこ
春風にぬつと現はれ飛行船	高梨英子

友岡案山子 私の選んだ十句

みづうみに山は雪解を急ぎをり	佐保光俊
泣き相撲身を反らし泣く子どもの日	村上正人
とことはに桜は吾に咲きにけり	高尾ひとみ
長閑なり遊覧船に手を振る子	綾乃
汽車待ちのホームの屋根に夏燕	栄吉
乗継を待つ山間の日永かな	新庄憲彦
春風にぬつと現はれ飛行船	高梨英子
露長けて八十八夜の雨に濡れ	暁子
山峡の寺は夏炉を絶やさざる	桑門わかこ
丘に立ち吾春風を味はへり	雲雀